

## I. 導入

おはようございます。イスラエルのカイサリアにある古代ローマの劇場は、イエスがお生まれになる10年ほど前にヘロデ王が建てたものです。この劇場は復元され、今でも使われています。これは、使徒10章の学びにぴったりのシンボルだと思います。というのも、使徒10章は、主が脚本を手掛け、ペトロとコルネリウスが主人公を演じる劇として描写することができるからです。



使徒10章で、コルネリウスとペトロは各々、主から幻を見せられます。それで、ペトロはコルネリウスに会うため、そして福音がすべての国の人々に宣べ伝えられる道を開くために、ヤッファからカイサリアへと海沿いを北上します。この劇場は、カイサリアの南部に位置しますから、ペトロが町に着いた時、おそらく劇場を目にしたでしょう。劇場を見て、自分が神の描かれた演劇の役者だと考えたのでしょうか。世界というステージでその劇を披露しているのだと思ったのでしょうか。もちろん、神が目的をもってペトロをカイサリアの町に送られたことは、ペトロもわかっていました。けれどもそれは後ほど話しましょう。

ではまず、使徒言行録 10:1-8 にある劇的なできごとを読むことにしましょう。

## II. 聖書朗読 使徒言行録 10:1-8, (新共同訳)

10:1 さて、カイサリアにコルネリウスという人がいた。「イタリア隊」と呼ばれる部隊の百人隊長で、10:2 信仰心あつく、一家そろって神を畏れ、民に多くの施しをし、絶えず神に祈っていた。10:3 ある日の午後三時ごろ、コルネリウスは、神の天使が入って来て「コルネリウス」と呼びかけるのを、幻ではっきりと見た。10:4 彼は天使を見つめていたが、怖くなって、「主よ、何でしょうか」と言った。すると、天使は言った。「あなたの祈りと施しは、神の前に届き、覚えられた。10:5 今、ヤッファへ人を送って、ペトロと呼ばれるシモンを招きなさい。10:6 その人は、革なめし職人シモンという人の客になっている。シモンの家は海岸にある。」10:7 天使がこう話して立ち去ると、コルネリウスは二人の召し使いと、側近の部下で信仰心のあつい一人の兵士とを呼び、10:8 すべてのことを話してヤッファに送った。

## III. 教え

ローマ兵の百人隊長には、100人の部下がいました。ですから、コルネリウスは権威者であり、人が自分に従うことに慣れていました。彼は、イタリア隊と呼ばれる部隊の百人隊長ですから、イスラエルは彼の故郷ではありません。コルネリウスの出身地では、ローマ神話のたくさんの神々を崇拝する風習がありました。その中には、酒の神や戦いの神もいます。しかし、コルネリウスはローマ神話の偽りの神々を信じていませんでした。彼は、イスラエルを占拠するローマ帝国の兵のひとりでしたが、イスラエルの神、すべてをお創りになった創造主なる神を信じるようになったのです。使徒 10:2 にはこうあります。



**「信仰心あつく、一家そろって神を畏れ、民に多くの施しをし、絶えず神に祈っていた。」**

コルネリウスとその家族は、まことの神を礼拝していました。そして、彼は多くの施しをする敬虔な人でした。けれども、ユダヤ教に改宗してはいなかったため、異邦人でした。つまり、ユ

ダヤ人にとってはよそ者だったわけです。なぜコルネリウスがユダヤ教に改宗していなかったのかはわかりません。もしかすると、公に改宗してしまうと役職を失うかもしれないと恐れたのかもしれない。わかっていることは、ユダヤ人にとって、すべての異邦人とその家庭は汚れていると見なされていたことです。当時の良識あるユダヤ人が異邦人の家を訪れることはありませんでした。その異邦人がまことの神を礼拝する評判の良い人でもそうでした。モーセの律法によると、ユダヤ人と異邦人との間には乗り越えられない壁がありました。しかし、イエスはその壁を取り壊すために来られました。ペトロは、まもなくそのことをはっきりと知るようになります。ユダヤ人は異邦人を見下していました。そして、ローマ兵については自分たちの国を征服した敵だと嫌っていました。けれどもここで、神からの幻を見たコルネリウスは、ペトロを探しに人を送ります。そして、ペトロの心は変えられます。

コルネリウスは午後 3 時ごろ祈っていました。この一節から、コルネリウスがユダヤ人の日々の祈りの習慣を守っていたことがわかります。そして、その日、コルネリウスが祈っていると、驚くべきことが起こりました。幻で天使があらわれ、彼に話しかけたのです。使徒 10:4「彼は天使を見つめていたが、怖くなって、『主よ、何でしょうか』と言った。すると、天使は言った。『あなたの祈りと施しは、神の前に届き、覚えられた。』」神は、祈りと善行に現わされたコルネリウスの信仰に答えて、天使を送ってくださいました。

天使は、コルネリウスに人を送ってペトロを招くよう指示しました。ここで、天使がしたこと以上に天使がしなかったことが興味深いと思います。神はコルネリウスにイエスの福音を聞いてほしいと明らかに望んでおられました。それは、コルネリウスと家族がイエスを信じて罪の赦しと救いをいただくためです。神は天使を送ってまで、コルネリウスが福音を聞くチャンスを与えようとしておられます。しかし、天使は福音を告げず、イエスについて一言も語っていません。天使はただ、「ペトロを招きなさい」と言うだけです。

神のご計画の神秘のひとつは、教会の人々を用いて福音を宣べ伝えさせるという神のご選択です。神は天からすべての人々に直接イエスのことを語ることもおできになります。また、天使をすべての家に遣わしてイエスのことを語らせることもできます。しかし、イエスがダマスコに向かう途上のタルソのサウロに語ったようないくつかの例外を除いては、神はそのような直接的な方法を避けておられるようです。それよりも、神は教会を用いられます。神は、「ペトロを招きなさい」と言われるのです。神がペトロを送り出されたように、私たちをも送り出されます。それは、イエスの福音を人々に伝えるためです。しかし、神は、まずペトロの心を整えなければなりませんでした。

#### IV. 聖書朗読 使徒言行録 10:9-16, (新共同訳)

10:9 翌日、この三人が旅をしてヤッファの町に近づいたころ、ペトロは祈るため屋上に上がった。昼の十二時ごろである。10:10 彼は空腹を覚え、何か食べたいと思った。人々が食事の準備をしているうちに、ペトロは我を忘れたようになり、10:11 天が開き、大きな布のような入れ物が、四隅でつるされて、地上に下りて来るのを見た。10:12 その中には、あらゆる獣、地を這うもの、空の鳥が入っていた。10:13 そして、「ペトロよ、身を起こし、屠って食べなさい」と言う声がした。10:14 しかし、ペトロは言った。「主よ、とんでもないことです。清くない物、汚れた物は何一つ食べたことはありません。」10:15 すると、また声が聞こえてきた。「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない。」10:16 こういうことが三度あり、その入れ物は急に天に引き上げられた。

#### V. 教え

聖書に、清い動物と清くない動物という言葉が最初に登場するのはノアの箱舟の場面です。ノアは、清くない動物をすべて一つがいつつ、



清い動物をすべて七つがいつ取るように命じられました。清い動物を数多く取らなければならなかったのは、主へのいけにえとして使うため、そして、洪水直後の食料として必要だったからです。しかし、聖書によると、動物をどうやって清い物と清くない物に分けるかについて神はノアに説明しておられません。ノアはすでに、この考え方を理解していたようです。

後に、モーセの律法で、神はイスラエルの民に、動物や魚、昆虫を清い物とそうでないものに種類別に分ける規定の詳細を与えられました。そして、民は清い物のみ食べることを許されました。清い物と汚れた物の選別法については、いろいろな説があります。汚れた動物が媒体となるあらゆる疫病からイスラエルの民を守るための規則だと言う人もいます。汚れた動物は異教の儀式や偽りの神の象徴として使われたものだと言う人もいます。食物についての規定に道徳上の理由を当てはめようとする人もいます。例えば、ライオンが汚れているとされたのは、ライオンが狩りをして他の動物を殺すので、恐れと死をもたらすというのです。



こういった説明の数々は興味深いものですが、詳しく調べてみるとどこかで矛盾が生じます。汚れた動物が疫病を媒介するというのなら、まだ現代のような医学も冷蔵庫もない新約時代のクリスチャンがそれを食べてよいとされたのはなぜでしょう。偽りの神と関わりのある動物が汚れた動物なら、エジプトで崇拝されていた牛が清い動物とされていたのはなぜでしょう。ライオンが狩りをして他の動物を殺すから汚れた動物とされていたのなら、ユダヤ人の男性が狩りをして殺すことが許されていたのはなぜでしょう。

清い動物と汚れた動物の選別については、神の主権者なるご意志により決められたと考えるのが納得のいく説明でしょう。それは、私たちの理解できるような基準ではありません。それにしても、なぜこのような複雑で厳しい食物規制を神はイスラエルの民にお与えになったのでしょうか。イスラエルの民が他の人々とは目に見えて違うものとする事で、独自の民としての強い帰属意識を与えることが目的だったのではないのでしょうか。イスラエルの民にはそのような固有の民としてのアイデンティティーが必要でした。それは、異教の国々の人と自分たちは違うのだと考えるためであり、また、長年故郷の国から捕囚として離れてもその帰属意識を保つためです。モーセの律法にある他の掟と同様、これらの食物規制は、ユダヤ人が周りの異文化に吸収されてしまうのを防いでくれました。ユダヤ人団体や家庭では、他のユダヤ人と何百年も離れていても、モーセの律法の主要な部分を今も守っている人たちがたくさんいます。

モーセの律法にある清い物と汚れた物に関する規定は、食物だけにとどまらず、生活のあらゆる側面に関わります。これらの規定によって、ユダヤ人とユダヤ人でない人が自由に交流することが難しくなり、人間をユダヤ人と異邦人のふたつに分ける壁ができました。この壁は、メシアが来られるまでは、イスラエルの民を守る重要な役割を果たしました。しかし、約束されたメシアであるイエス・キリストの来臨に伴い、人や文化に立ちはだかる壁が取り去られる時が来ました。

使徒10章から何年か経って、パウロはエフェソ2:13-16でこのように記しています。「2:13 しかしあなたがたは、以前は遠く離れていたが、今や、キリスト・イエスにおいて、キリストの血によって近い者となったのです。2:14 実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、2:15 規則と戒律づくめの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、2:16 十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。」教会は、すべての国の人々を歓迎します。キリストにあって、私たちは一致と平和を見出します。イエスが十字架上で成し遂げられた御業により、神と人とを隔てる壁、そして民族や人種を隔てる壁をイエスが取り壊してくださいました。キリストにあって、私たちはひとつとされるのです。

今日の聖書箇所、神は清い動物と汚れた動物の幻を用いてペトロに教えておられます。ペトロは、「屠って食べなさい」と言われます。しかし、ペトロは断りました。それに対し、使徒 10:15 でペトロはこう言われます。「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない。」この幻は三度繰り返されます。そして、旧約の食物規制にクリスチャンが縛られるべきではないことをペトロはしっかり理解したでしょう。しかし、この幻は食べ物よりはるかに重要なことについて語っていました。そのことをペトロは知るようになります。では、使徒 10:17-23a を続けて読みましょう。



## VI. 聖書朗読 使徒言行録 10:17-23a, (新共同訳)

10:17 ペトロが、今見た幻はいったい何だろうかと、ひとりで思案に暮れていると、コルネリウスから差し向けられた人々が、シモンの家を探し当てて門口に立ち、10:18 声をかけて、「ペトロと呼ばれるシモンという方が、ここに泊まっておられますか」と尋ねた。10:19 ペトロがなおも幻について考え込んでいると、“霊”がこう言った。「三人の者があなたを探しに来ている。10:20 立って下に行き、ためらわないで一緒に出発しなさい。わたしがあの者たちをよこしたのだ。」10:21 ペトロは、その人々のところへ降りて行って、「あなたがたが探しているのは、このわたしです。どうして、ここへ来られたのですか」と言った。10:22 すると、彼らは言った。「百人隊長のコルネリウスは、正しい人で神を畏れ、すべてのユダヤ人に評判の良い人ですが、あなたを家に招いて話を聞くようにと、聖なる天使からお告げを受けたのです。」10:23 それで、ペトロはその人たちを迎え入れ、泊ませた。

## VII. 教え

三人の人が来たことで、神が幻でペトロに語られたことを理解する手助けになったことでしょう。一目見ただけで、彼らがユダヤ人でないことはわかったはずですが、ユダヤ教の律法では、ペトロは彼らをユダヤ人の家に招き入れることはできません。しかし、神がペトロに幻を見せ、神の霊がペトロに語られたので、ペトロは彼らを迎え入れ、食事を出し、休ませました。神はすでにペトロの心を柔軟にしてくださり、皮なめし職人の家に滞在させられました。ここで神は、さらにペトロの心をやわらげ、異邦人の訪問者を迎え入れるようにされました。使徒 10 章の後半で、神はペトロに思い切って異邦人の家に入るよう導かれます。これは、当時のユダヤ人にとっては考えられない行動です。



## VIII. 結び

次回も使徒 10 章の学びを続けますが、そこで、ペトロがコルネリウスの家に到着した後どのようなことが起こったかを見ていきます。今日のところは、今日読んだ箇所から学んだ3つのことを改めて振り返りましょう。

ひとつめは、私たちがイエスの福音を宣べ伝えなければならないということです。神は天使を用いてそうさせることもおできになりますが、私たちをとおしてそうなることをお選びになったのです。これを重荷ととらえるのではなく、大きな特権と考えるべきです。私たちは、主のみことばとイエスを信じる信仰による救いの福音を委ねられているのです。ですから、この宝を周囲の人たちと分かち合うよう努めましょう。

次に、福音伝道で成果を上げるためには、多くの場合、私たちが居心地の良い領域から踏み出す必要があるということです。自分が当たり前と思っていた偏見などを捨てて、主が送られる人のもとへ行かなければなりません。ペトロは異邦人の訪問者を歓迎し、迎え入れました。私たちも

彼の模範に倣って、あらゆる人と関わり、家や教会に迎え入れましょう。

そして3つめは、本当の意味で清い物と汚れた物が何であるかを学ぶことです。旧約聖書にある清い物と清くない物に関する祭儀のための律法は、イスラエルの民にとって必要な目的を果たしました。しかし、キリストにある私たちは、律法や慣習に縛られていません。ですから、神の聖霊の導きに従って聖なる生き方をすることで、本当の清さを学べます。

最後に、マルコ 7:14-23 にあるイエスのことばでしめくりたいと思います。「7:14 それから、イエスは再び群衆を呼び寄せて言われた。『皆、わたしの言うことを聞いて悟りなさい。7:15 外から人の体に入るもので人を汚すことができるものは何もなく、人の中から出て来るものが、人を汚すのである。』7:16 (†底本に節が欠落 異本訳) 聞く耳のある者は聞きなさい。7:17 イエスが群衆と別れて家に入られると、弟子たちはこのたとえについて尋ねた。7:18 イエスは言われた。『あなたがたも、そんなに物分かりが悪いのか。すべて外から人の体に入るものは、人を汚すことができないことが分からないのか。7:19 それは人の心の中に入るのではなく、腹の中に入り、そして外に出される。こうして、すべての食べ物は清められる。』7:20 更に、次のように言われた。『人から出て来るものこそ、人を汚す。7:21 中から、つまり人間の心から、悪い思いが出て来るからである。みだらな行い、盗み、殺意、7:22 姦淫、貪欲、悪意、詐欺、好色、ねたみ、悪口、傲慢、無分別など、7:23 これらの悪はみな中から出て来て、人を汚すのである。』

食べるべきでないものを食べてしまったり、律法や慣習を破ったりということで、私たちが汚れたものになるわけではありません。私たちが汚すのは、神から私たちを引き裂く自分自身の罪です。意地悪な考え、悪い言動が私たちが汚れたものにするのです。しかし、神に感謝します。イエスを信じるなら、私たちは赦しを受け、主の血潮が私たちが洗い清めてくれます。キリストの十字架をとおして、私たちが清められ、神に受け入れられるのです。これこそ神の恵みです。その恵みは、私たちの主、イエス・キリストを信じる信仰によって与えられます。



では祈りましょう。

## IX. 祈り